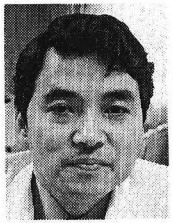
第8章

国際社会で生きるために

道なき道を切り開く生き方



菅波茂
（医師・AMDA代表）

「緊急医療援助のために、何としても七二時間以内にサハリンに入ろう。ＡＭＤＡが一番乗りをしよう。『国境なき医師団』に後れをとってはならない」

岡山市内の菅波医院内にある、アジア医師連絡協議会（ＡＭＤＡ）本部の小さな事務所で、男たちの高揚とした声が響きわたった。

一九九五年五月二七日午後一〇時、マグニチュード七・五の大地震がサハリンを襲った。阪神大震災発生から、わずか四カ月後のことである。

岡山県に本部を置くＡＭＤＡの緊急医療援助部門「ＡＭＤＡアジア多国籍医師団」も、さっそく災害援助のための医師派遣の検討を開始した。二八日は日曜日だったため、現地の公式情報は入手できない。しかし、医師が派遣できる可能性に絞り込んで検討を始めた。資金の確保から始まって、航空機の手配、ビザの手配、派遣の医師・医療機具の選定、医療活動の許可など、「七二時間以内の派遣」の前には、クリアしなくてはならない難関が

山ほどある。

「あわてるな、あせるな、しかし決してあきらめるな。どこかに絶対にあながあるはずだ」

リスクのたいへん大きい仕事であるのにもかかわらず、男たちの執念に事務所の中は異様な熱気に包まれていた。地震発生から六〇時間経過した五月三〇日午前一〇時、正式なロシアのビザ発給なしに、ＡＭＤＡの医師団を乗せたオホーツク航空のチャーター機は、稚内空港からユジノサハリンスク空港に向けて出発した。午後五時に無事到着、救援医療活動はただちに開始された。

「顔が見えない」日本の国際貢献

「国際貢献」という言葉を最近よく耳にするようになった。日本の国際貢献は、ＯＤＡ（政府開発援助）に見られるように、気前よく金は出すが、「顔が見えない」と、国際社会の中での評判は決してかんばしいものではない。しかし、狭くなった地球で平和に、そして豊かに共生していくためには、国際貢献は決して疎かにできない重要な国家戦略である。私たち一人ひとりの日本人にとっても、国際貢献への参画は身近な問題へとなりつつあるのだ。

岡山市にアジアに確固たる人脈を築き、その地域での医療協力活動を中心とする国際貢献に取り組んでいる開業医がいる。しかも、その取り組みはさまざまな国籍の医師が参加し、多岐にわたる国際協力プロジェクトとなっている。

この国際貢献を推進する組織が、岡山市を本部にアジア各地域に支部をもち、国連認可も受けている、日本有数の国際NGO（Non Governmental Organization：非政府組織）、「AMDA（アムダ）」だ。その創立者であり、代表を務めているのが菅波茂（すがなみ）である。

アジアとの出会いを生んだ一枚の写真

菅波茂。一九四六年一二月、広島県生まれ。福山市福山誠之館高校出身。

菅波とアジアとの出会いは高校二年のときにさかのぼる。

一九六三年の夏、菅波は一枚の写真に遭遇した。自分とほぼ同年齢の一人の日本人兵士が、ニューギニアの海岸の浅瀬に顔を半分突っ込んで死んでいた。菅波は金縛りにあったように、その写真からしばらく目を離すことができなかった。自分と同じような若者が、アジアの見知らぬ土地で、なぜ命を落とさなければならなかったのか。

多感な青春時代であったことも手伝って、強烈な印象を残したのだろうが、このときの素朴な疑問が、アジアに対する「思い入れと執念」を菅波の中に醸成させていくきっかけとなっていく。後のAMDA設立につながっていく歴史の第一歩だった。

法学部志望から一転、医学部へ入学

祖父は裁判官、父は法学部出身の教員という家庭に生まれた菅波は、将来は自分も当然法曹界に進むものと考え、大学受験に向けて文科系の勉強に精を出していた。得意科目は英語と世界史、数学や物理は苦手であった。

高校三年生の夏、父親がふと漏らした「シュバイツアーも悪くないな」という一言がきっかけで、医学部の受験を考えるようになる。しかし、文科系の勉強しかしてきていないのに、今さら受験に間に合うのだろうか。

幸運なことに、隣の岡山県にある国立岡山大学の医学部は、数学や理科系科目が相対的にやさしく、英語と歴史が難しいという文科系に有利な得点配分になっていた。東京の私立大学法学部と岡山大学医学部に合格した菅波は、父親のすすめにしたがい、医師の道を選択した。

学園紛争のまっただ中、アジア放浪の旅へ

一九六九年、大学四年生の頃、大学は学園紛争に巻き込まれ、長期のストで休講が続いた。「団塊の世代」は群れるのを好むが、菅波は騒然とした学生運動の中で、どこへも属さず、しかしクラス討論会などでは自分の考えを明快に述べた。

政治的闘争は理念の闘いでもある。そのため、敵、味方がはっきりと分かれる。入学以来、一緒にアジアの研究に打ち込んできた仲間も、各セクトの中に組み込まれていき、チリジリになっていった。そんな渦中にあっても、菅波はかたくななまでに孤高を守り抜いた。

当時は、小田実の『世界なんでも見てやろう』という本が若者のバイブルになっていた。ようやく普通の人の海外渡航が自由になったばかりの時代、当時の若者たちの海外に対する関心の高さと旅行熱は、現在の比ではない。この年、休校になった大学を後にして、菅波はこの本をリュックに入れてアジアへの一人旅に出発した。

横浜を出発してからアジア各国を放浪すること八カ月に及ぶその旅の間、医学生として、また、病気にかかったため一人の患者として、アジアの医療現場をわが身をもって知るという貴重な体験をした。そして、アジアの市場の雑踏に代表されるようないかがわしさ、公私混同の活力といった多様性の共存と活気など、アジア独特の不思議な魅力に、菅波は虜になっていく。

「現代医学は金がかかりすぎる」

放浪の旅から帰国して二年後、菅波はアジアの医療事情を調査するために「岡山大学医学部第一次クワイ河医学踏査隊」を組織する。その後、この調査隊は第三次まで実施するが、一九七六年からは「アジア伝統医学調査隊」と名称と調査内容を変更している。

実際にアジアの現場を歩いた菅波は、現代医学は金がかかりすぎ、アジアの辺境の地に定着させるには限界があることに気がついた。

「日本に漢方や針治療があるように、アジアにもその国独自の伝統医学があるはずだ。それを導入すれば、少ない予算でも活動を継続できるのではないか」

そこで一行は、本格的にアジア伝統医学の調査に乗り出すことにしたのだった。

菅波の仕事の進め方の特徴の一つは、すべてがプロジェクト中心主義をとっているという点だ。プロジェクトの存在理由がなくなれば、ためらうことなく新しいプロジェクトへとスクラップアンドビルドしていく。クワイ河医学踏査隊からアジア伝統医学調査隊への

衣更えも、アジア医療調査が深化していく中での、必然的な流れだった。

カンボジアで「現実の壁」に直面

一九七九年、カンボジアに日本の医学生グループ「西日本アジア医学生連絡協議会」から医師一名と医学生が難民の医療活動のために派遣された。西日本にある医科大学のアジアをテーマとするサークルの連絡会として発足したこの会は、菅波が中心になって結成した。

このカンボジア派遣も、「難民のために何かできることはないか」というサークルの総意で決定したものだった。派遣された医師は、その二年前に岡山大学医学部大学院を卒業し、榊原十全病院に勤務していた菅波茂自身である。

しかし、派遣チームは、実質的な活動に従事することはほとんどできなかった。カンボジアからタイに難民が流入しているという報道を頼りにタイ入りしたものの、難民キャンプの位置すらなかなか特定できない。やっとキャンプにたどりついても、活動の受け皿がない。

当然、歓迎されるものと期待して現地に赴いたにもかかわらず、まったく活動ができなかったことは、菅波にとって大きなショックだった。情報と受け皿がなければ何もできない、善意だけでは何もできない、という現実の壁を目の当たりにして、青年の甘い理想はもろくも崩れさった。

アジアにおけるネットワークづくりに尽力

しかし、そんなことで音をあげる菅波ではなかった。

「医学生の時代からアジア各国の医学生との交流を深め、情報収集や受け皿になってくれる拠点をつくればいい。そのネットワークを活用すれば、将来、アジアで医療協力活動ができるのではないか」

夢は大きくふくらんだが、当初の活動は地道なものだった。カンボジアを起点に、具体的な活動実績を積みあげ始めた他の日本のNGOを尻目に、菅波たちはネットワーク拡充のための国際会議の開催に全精力を傾けた。

一九八〇年、アジアの医学生が将来の夢を語り合う場として「アジア医学生国際会議」を開催。次いで「東日本アジア医学生連絡協議会」の設立、西日本と東日本の統一、「アジア医学生国際会議」を毎年開催。そして、一九八四年、医療分野を専門とする多国籍N

GO「アジア医師連絡協議会（以下、AMDA）」が設立された。

医師と医学生と双方の国際会議を通じて、アジアの医師・医学生の間のネットワークは着実に広がっていった。特に九〇年代に入ってからは、各国の医師たちとの十年来の親交をベースに、ネパール、フィリピン、バングラデシュ、カンボジア、ソマリア、ジブチなど複数の国々にまたがって、アジアの友人たちとともに本格的な医療協力活動を展開できるまでに成長した。

当初の思惑どおり、医学生時代より培ったアジアでの友人関係は、医療協力活動を行ううえで、情報収集や受け皿の理想的な拠点として機能してくれた。

さらに一九九三年、AMDAは、冒頭でも紹介したとおり、フランスの著名な「国境なき医師団」と並ぶ、紛争や自然災害などの緊急時に俊敏に対応できる、緊急医療援助組織「アジア多国籍医師団」を設立したのである。

国際社会における交際術で最も大切なこと

菅波が一九七九年にカンボジア難民支援のためタイを訪れてからの一〇年間は、アジアにおける情報拠点と受け皿づくりのため、ひたすら我慢を強いられた雌伏の時代だった。

菅波は、なぜアジアにおける友人関係づくりに着目したのか。そして、なぜそれが後に数々のプロジェクトの成功に結びついていったのだろうか。

「狭い村社会の日本では組織間の連携を重視するため、個人はその組織の歯車にすぎません。しかし、国際社会では、『私とあなた』という個人と個人の信頼関係を最も重視するんです」

日本の企業は、対外折衝部門の人間が三年間で交代していく。これではその間に培った個人的な信頼関係は断ち切られてしまう。そこに気づいたからこそ、お互いに信頼できる人間関係を築くことに力を入れたのだと菅波はいう。

「日本人は、『ホームパーティ』の重要性を見落としています。これは夫婦同伴のプライベートなネットワーク的な関係です。人間というのは、非公式の場でつき合って、初めてお互いがわかり合えるものなんです。そこで培った人間関係を公式な場につないでいくのが国際社会の交際術なんです」

日本の対外組織との関係は「接待」で維持されるといってもいい。しかし、「接待」は、組織の中のヒエラルキーをそのままもち込むため、胸襟を開いてつき合うということは難しい。

「日本のサラリーマンの不幸は、こうした非公式のパーティの費用を会社の経費では落とせないことです。だから個人的に努力するしかない」

日本のNGOの歴史を振り返る

一九七八年のカンボジア難民支援をきっかけに日本に誕生したNGO（非政府組織）の数は、現在ではもう四〇〇近くに及ぶ。これらのNGOの特徴は、非営利目的で、国境を越えて活動することにある。

日本の大手のNGOの本部は九割方東京にある。多くの企業が本社を東京にかまえている理由と同じで、資金集め、パブリシティ、都民の社会貢献活動に対する意識の高さなど、あらゆる点で東京が有利なためだ。

岡山という地方都市に本部を置くAMDAは、その点でも異彩を放っている。それだけに、プロジェクトを実行するにも、「金がない」「特定の新聞のバックアップが得られない」など、当初から苦労を強いられた。

湾岸戦争が勃発した一九九〇年は、日本のNGOにとって第二のエポックメイキングな年となった。

日本政府は一兆三三〇〇億円もの資金を拠出し、多国籍軍の支援を行った。しかし、腹をくくった破格の資金提供にもかかわらず、国際社会の中では「顔が見えない」といわれ、その評価は決して芳しいものではなかった。そのため、国際社会でアピールをする国際貢献のあり方が、まさに日本の国家的課題となっていた。

現場に参加して一緒に汗をかくことの大切さにやっと気づいた日本政府が、欧米諸国と同じようにNGOを活用した国際貢献の手法を本格的に検討し始めたのもこの頃だ。そして一九九一年以降、郵政省の「国際ボランティア貯金」や外務省などによるNGO支援を積極的に行うようになる。

第三のエポックは一九九四年に起きたルワンダ難民のときである。政府が自衛隊を現地に派遣する前に日本のNGOがゴマの難民キャンプの救援活動に参加した。教訓を活かした日本のすばやい対応は大いに歓迎された。

そして、第四のエポックとなったのが阪神大震災である。復興のため、全国から大勢のボランティアの人が神戸に駆けつけた。しかし、救援活動は初体験の若い人が大半を占めたため、なかなか初動態勢が整わなかった。

このときに活躍したのがNGOである。緊急時の救援や地域開発を得意とするNGOが、

ボランティアの受け皿として活動したのだ。この活動はメディアによって紹介されるところとなり、多くの国民がNGOとボランティアの存在と役割について理解するようになったのである。

AMDAの存在を際立たせる「人道援助の三原則」

AMDAは医療協力を中心とする国際貢献活動を主としているが、冒頭で紹介したような緊急医療援助活動の他にも、在留外国人に対する医療情報提供、アジアでの医療貢献組織のネットワーク化、医療協力活動など、最近ではその活動領域も多岐にわたっている。

しかし、その活動内容もさることながら、多国籍型の組織形態をとっていることが、多くのNGOの中でAMDAをいっそう際立たせている。アジアに張り巡らしたネットワークにより、いつでもプロジェクトを組める体制が整っており、すみやかに活動展開が行えるというフットワークのよさは、他の追随を許さない。

それに加え、AMDAは「人道援助の三原則」という明確な理念をもっていることも特筆すべき点だ。

①誰でも他人の役に立ちたいという気持ちをもっている
②この気持ちの前には国境、人種、民族、文化の壁はない
③援助を受ける側にもプライドがある

世界広しといえども、国際貢献に携わるNGOでこのような理念を打ち出しているのはAMDAだけである。

「アジアの人々は常に『受け身』の立場に置かれている。『あなた方が必要だ』という明快なメッセージを送る必要があるのです」と菅波は語っている。

国際貢献活動一般にいえることだが、マスコミは外国から援助が入ったときは大きく報道するが、実際の援助活動には多くの現地の人たちが献身的に参加している。しかし、そういった現地の人たちは、マスコミにはほとんど紹介されない。

AMDAの活動は、あくまでも現地の支部の活動が主力で、他国の支部がそれをサポートするという図式をとる。これは「援助される側にもプライドがある」という理念を具現化する一例である。

根底に流れる「相互扶助の理念」

「欧米の人権思想の特徴は、その最終目的が援助をする人の魂を救済することにあります。これはキリスト教の信仰によるものですが、己の魂の救済が第一義的ですから、極端にいえば、助ける対象は誰でもいいのです。もちろん、『人間としてかくあるべし』という人権意識は極めて大事なものです。欧米の国際貢献のNGOは、この人権思想を行動哲学としてもっています。AMDAは、この人権思想に加えて、『困っているときはお互い様』という思想をもち続けたいと思っています」

これも人権思想だけで援助活動にかかわると、ややもすると援助される側のプライドを傷つけることを懸念してのうえでのことなのだ。

「阪神大震災のとき、多くの開発途上国から支援の申し出がありましたが、日本政府は断ってしまった。これはぜひ受けるべきだったんです。『困っているときはお互い様』というメッセージを平易な形で示す絶好の機会をみすみす逃してしまったようなものですよ」

「説明なき行動」は誤解を生む

さらに菅波は次のように強調する。

「国際関係においては、有言実行、つまり『わかりやすさ』ということが、たいへん重要な意味をもちます。説明なき行動は、ほぼ誤解されるといっても過言ではありません。日本的な『以心伝心』という考え方は、国際社会で通用しないばかりか、時にたいへんな危険を伴うことを肝に銘ずるべきなのです」

国家としての行動が「わかりやすさ」をまったく伴わなかった典型的な例が、太平洋戦争時の日本だ。日本人は過去の恥部として戦争に触れたがらず、謝罪外交に終始するばかりで、なぜ日本が負けたのかという本質的な研究は未着手のままだ。

菅波はAMDAの活動を発展させる過程で、当時の日本の行動を徹底的に分析・研究している。日本人が大がかりに異文化と接触した初めてのケースとして、その行動特性、組織、考え方は、経営戦略上の絶好のケーススタディになる。特にアジアが舞台となっているため、そこから反面教師として、アジアでの活動に活かせる部分は多いはず、と菅波は考えているのだ。

「当時の日本は、太平洋戦争の意義と目的をアジア諸国に対し、わかりやすく説く努力をしていたか。これがそもそもの失敗の始まりではないか」

究極の「親切」とは何か

国際社会で通用する「わかりやすさ」を追求していった結果、菅波は「金、力、親切」の三つに思い至った。

「金」は、今日の飯、明日の希望を指す。そこには「平和な国際社会を築くには物質的に豊かになることが不可欠」という認識をアジアで得た菅波の実感が込められている。

「力」は武力を意味する。これは平和維持手段の一つとして、軍事力による抑止力が有効という考えに立脚してのことだ。日本人にはおそらく抵抗があるだろうが、国際社会ではむしろこちらが常識といってもいい。「俺は武器をもっているのだぞ」とメッセージを発信するだけでも十分な抑止力になる。

「たとえば、戦前に『大和』『武蔵』を極秘で建造しましたが、それを公表することが抑止力になる。こういった情報宣伝戦略は日本は不得手でした」

軍事力の均衡だけでは、偶発的な戦争は避けられない。そこで三番目の「親切」を加えた。

「究極の『親切』とは、ゼニカネではなく、命にかかわる状況での行為の実践、『人道援助』のことです。これが国際社会において信頼関係を築く第一歩になる。そしてその前提になるのが『困ったときはお互い様』という考え方です。『人道援助』による国際貢献を通じて、世界平和の実現に寄与すること。これがAMDA設立の本当の狙いなのです」

「タブー」の中から教訓を学びとれ

菅波は、年齢は五〇近いにもかかわらず、童顔のせいもあって四〇そこそこの年齢にしか見えない。かっこいい中年といった印象だ。しかし、その内面は、外見の若々しさからは想像が困難なほど、洞察力が鋭く、深い人生経験を積んだ智慧者である。また、数々の国際プロジェクトの推進力となってきた見識の高さは、「タブー」にヒントを得たと菅波はいう。

「人が注目しないタブーといわれているものの中にこそ、学ぶべき点が多々隠されているものなんです。先ほどの『太平洋戦争』もそうですが、AMDAでは『創価学会』の組織づくりも手本にさせてもらいました。『池田大作論』は数多く出ていても、『創価学会』の組織運営のうまさに着目している人は、あまりいませんから。それから笹川良一。彼もA級戦犯であることと競艇くらいしか一般には知られていませんが、戦前は野党の国会議員であったこと、巣鴨プリズンに入った本当の理由、釈放後どのようにして世界でも有数の

NGO『日本財団』をつくることができたのか。こういったことはベンチャービジネスをおこす人はぜひ勉強してみるべきでしょう」

過酷ともいえる現場で、道なき道を切り開いてきた菅波の日本企業に対する見方は、なかなか辛辣だ。

「日本のサラリーマンが疲れているのはなぜかわかりますか。経営環境が厳しい時代になって、ローリスクでハイリターンの仕事を求められているからです。そんな仕事が簡単に見つかれば誰も苦労しませんよ。その呪縛から逃れられないから活力が沸いてこない。ハイリターンの仕事にはハイリスクがつきものです。平坦な道を選べば、得るものが少ないのは当然です。そのかわり、リスクの高い仕事は困難なだけに、成功したときの喜びは何ものにもかえがたい。ギャンブルのような麻薬的なおもしろさがあるんですね。AMDAの『緊急医療援助』なんて、まさにハイリスク、ハイリターンそのもの。闘争本能を刺激されて、男は初めて奮い立つものなんですよ」

菅波の若さとそのバイタリティは、AMDAの活動そのものがもたらしているといえそうだ。

AMDAの活動を支える五つの基本理念

これだけ大規模な活動展開を見せるAMDAだが、その組織運営ルールは驚くほどシンプルだ。

「AMDAは、活動をするための団体ですから、基本的なもの以外には、自由な活動の妨げになるようなルールはつくっていません。法治主義よりは人治主義、人に仕事がつくという考え方をとっているんです」

多国籍かつ多民族かつ多様な構成員のベクトルは、AMDAの基本理念と行動哲学によって収斂（しゅうれん）されると菅波はいう。

「AMDAには五つの基本理念があります。一つは、平和のための戦争抑止力を、武器に頼ることなく、『人道援助』の相互信頼感によってつくっていくこと。二つめは、基本理念として『相互扶助思想』を保持すること。三つめは、AMDAの『人道援助の三原則』です。四つめは人間の尊厳の三原則『自信、誇り、夢』を大切にすること。五つめが『多国籍』ということです」

この五つの高邁（こうまい）な理念とその実践が、AMDAの求心力となり、他と一線を画すNGOとして著しい成長を遂げた要因となっている。

「思い入れと執念」が智慧を呼ぶ

カンボジアに医療援助に旅立ってから約二〇年、ＡＭＤＡはいまや国連の認可も受けた日本有数の国際貢献機関となった。

しかし、菅波の夢は尽きることがない。地元岡山を中心に推進する将来プロジェクトの構想がいくつもある。国際貢献学を学ぶＡＭＤＡ国際大学、岡山県災害救助センター、国連ボランティア訓練センター……。その一つひとつの実現に向けて、菅波は精力的に取り組んでいくことだろう。

「すべては高校時代の『ニューギニア戦線のときの若い兵士の死』の写真という強烈な体験から出発しています。それが大きなモチベーションとなってアジアに対する『思い入れと執念』が生まれました。その後の大学時代のアジア放浪の旅、カンボジアでの挫折が、その『思い入れと執念』をますます増幅させていったのでしょう。強烈な体験がモチベーションを生み、それが『思い入れと執念』につながり、『思い入れと執念』があったから、大胆な発想と行動力が生まれたのでしょうね」。

己のリスクを省みず、渦中に飛び込む者には、女神が微笑み、智慧と勇気を授ける。そして人生の果実の蜜の味を知った菅波は、今日もアジアの同胞とともに渦中に生きる。

「本当の人生の楽しみは行為そのものの中にあるのですから」といって。